



身体接触行動における中日比較

呉, 映妍

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2009-03-25

(Date of Publication)

2011-08-30

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4622

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004622>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	呉 映妍
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 4622 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 21 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

身体接触行動における中日比較

審 査 委 員

主 査	教 授	宇津木 成介
	教 授	米谷 淳
	教 授	坂本 千代
	教 授	三木原 浩
	教 授	水野 マリ子

論文審査の結果の要旨

氏 名	吳 映妍		
論文題目	身体接触行動における中日比較		
判 定	合 格 不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	宇津木 成介
	副 査	教授	坂本 千代
	副 査	教授	米谷 淳
	副 査	教授	水野 マリ子
	副 査	教授	三木原 浩

要 旨

吳映妍の博士論文「身体接触行動における中日比較」は、中国の5カ所、日本の3カ所の大学の総計800名に及ぶ男女大学生を対象として行われた接触行動に関する質問紙調査をもとに構成されたユニークなものである。接触行動はコミュニケーション行動の原点とも言える行動であるが、母子関係における接触を除いて、これまでになされた研究は決して多くない。吳映妍の博士論文は、既存の日米比較研究、日韓比較研究を足場に、日本と中国の比較をはじめ、しかも大規模に行ったものである。さらに、これまで日本で行われてきたいわゆる異文化比較研究において、研究者が所属する日本の大学1校と、外国の大学1校の大学生同士を比較して異文化比較、国際比較を標榜するものが少なかった。このような比較は、単に2大学のサンプルを比較しただけのものであって、2つの国の文化を比較しているという主張は本来できないはずである。吳映妍は中国と日本の複数箇所において質問紙調査を実施することにより、同一国内における差異の大きさと、日本と中国の間の差異の大きさを比べることに成功した。

彼女の論文では第2章において先行研究の詳細なレビューが与えられ、次の第3章でそれら先行研究が使用した研究方法について検討を加えている。

先行研究の検討によって、彼女はジュラードが身体部位図を用いて行った研究を踏襲するとともに、すでに彼女が修士論文において行った予備的検討によって質問紙に改良を加えた。また、鈴木と春木による発達の調査の視点を導入し、記憶に基づく評価という制約はあるものの、中国と日本の接触行動を時間軸の中で比較することを可能にした。

第4章においては、先行研究に倣って身体部の24の各部位について接触の有無に基づく接触率を表示し、男女差、国と地域による差、接触相手による差、場面（公的場面と私的場面）による差について概要を示した後、分散分析の手法を使って、これらの要因の相対的な説明力を比較し、1) 接触行動の量を規定する最大の要因が公的または私的な場であること、2) つぎに大きな要因は接触相手の要因であること、3) 次に性差があることを示した。これらの要因の説明力の大きさと比較すると、国の違いや調査対象地による差の説明力はごく僅かであることが結論された。

第5章では先に述べた接触行動の発達の変化が取り扱われて、日本人が両親、とりわけ父親とは、概ね小学校高学年から中学校の時点で、ほとんど接触しなくなっているのに対し、中国人では引き続き高頻度の身体接触が維持されることが見いだされた。中国の5カ所の接触量変化がほぼ同一であり、また日本の3カ所もほぼ同一の変化を示しているが、両国の変化は全く異なっているという、「中国と日本の違い」が報告された。

本研究が提供した重要な事項は2つあって、一つは生物学的な仮説どおり、養育者としての両親への接触が減少するにつれて、恋人つまり生殖のパートナーとの接触が増大することがデータによって示されたことである。また、もう一つの重要な事項は、発達面における中国と日本の違いを説明するための仮説として、「子ども」概念に関する社会的制度の違いが提案されたことである。

吳映妍の研究は、今後、世代間の接触行動研究などに発展の余地があり、また、社会性を育成するという見地からの応用も期待される。

なお、研究史と先行研究の問題点のレビューについては「鶴山論叢」に、また接触行動の発達の研究の結果についてはレフェリー付論文として「国際文化学」誌に掲載されたほか、関連する研究が日本心理学会の大会において発表されている。よって、当審査委員会は全会一致で、学位申請者である吳映妍は博士（学術）の資格があると結論した。

以上

論文内容の要旨

(氏名 吳 映妍 , NO 2)

氏 名 吳 映妍

専 攻 応用コミュニケーション科学

指導教員氏名 宇津木 成介

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

身体的接触行動における中日比較

論文要旨

身体的接触行動は対面的なコミュニケーションの場で、人と人がコミュニケーションする際、身体を介して情報を伝達し、意思疎通を図り、一種の社会的な行動のことをいう。本研究では具体的な動作には触れないが、他人の体に触れること、撫でる、叩く、握手、キス、腕や肩の組み方、出会いや別れの際の挨拶、ハグ(擁抱)、などの日常における身体の接触、他の人の行動を導くものなど、または会話時に、発話に伴って相手の体に触れる行為全体を含む。対人コミュニケーションの場面において、身体接触行動は近い距離で相手にメッセージを伝達する機能を持ち、コミュニケーションのたいへん重要な手がかりとなるが、世界各地で行われている身体接触の度合いは必ずしも同じではない。

バーンランドをはじめ、研究者たちが対人身体接触行動の異文化比較を行った。アメリカ人のコミュニケーション研究者バーンランドはその著書『日本人の表現構造』で、日本とアメリカでの身体接触を比較し、日本人大学生とアメリカ大

学生の身体接触パターンの計量的調査を行い、その結果を発表した(Barnlund, 1975)。

彼の研究結果に示されているように、アメリカ人の全体としての身体接触量は日本人の2倍であり、母親との接触が2倍弱、父親との接触が2倍強である。また、異性との接触が2倍以上であったが、同性との接触では日米で大差がなかった。アメリカと比べ、日本人の間では接触率が低く、より孤立していることが分かった。バーンランドはアメリカ人にとって最も好ましくない相手との非言語的接触が、日本人の最も好ましいと思う相手との接触よりも大きいことに注目すべきだと指摘した。

先行研究を踏まえて、本論文は中国人大学生の身体的接触行動は日本人大学生の身体的接触行動と異なるパターンを表すのか、という仮説を立て、アンケート調査により、中国人大学生と日本人大学生の身体的接触の実態を明らかにしたいと考えた。また、国籍が身体的接触行動に影響を及ぼす要因であるのか、或いは他に大きな要因が存在するのかについて考察を行った。

中日比較を行った結果、中日とも、接触する部位としない部位は先行研究の結果とほとんど一致した。接触頻度において、中国人の身体的接触行動のパターンは日本人の身体的接触のパターンと似ておらず、反対に中国人男性と日本人男性の身体的接触パターンがたいへん類似し、中国人女性と日本人女性の身体的接触パターンが似ていることが分かった。

身体接触の頻度は、相手が異なることで変化する。中国人は同性友人との身体的接触が最も多く、異性友人との身体的接触が最も少ないのに対し、日本人は恋人との身体的接触が最も多く、父親との身体的接触が最も少ないことが分かった。

中国国内の5ヶ所を比べてみると南京の男性が最も身体的接触が多く、武漢の男性の身体的接触が最も少なかった。女性においては武漢や北京のほうが多くて、アモイのほうが少なかった。また、それぞれの身体的接触部位の特徴は少し異なることが分かった。

日本国内においては大阪の身体的接触が最も多いことが分かった。

全体的に男性より、女性のほうが身体的接触が多いと言える。

人間の行動は複雑なもので、単純に国籍で物事を判断するのはあまり好ましくないという結論に至った。